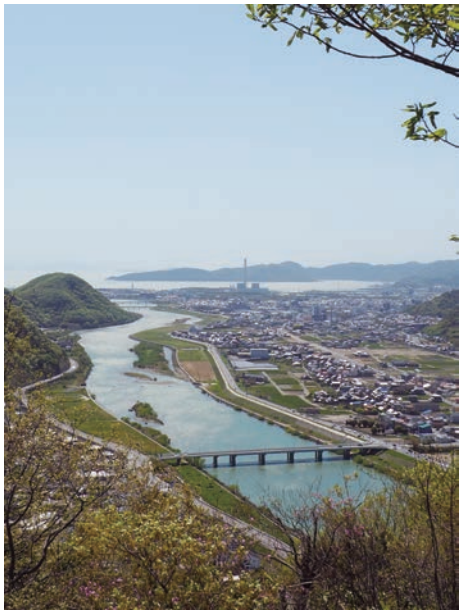
１．赤穂市の歴史的環境

（1）千種川との共生

播磨地域は、揖保川以東の流域で平野がよく開けている一方、赤穂市の所在する千種川流域にのみ平野の発達が見られない。岡山県東部と親縁性を持つこうした地形では、人々は網状河川の自然堤防上ではなく、川の氾濫から守られた山裾に寄り添うように住むのが一般的であった。古代には、比較的広い平野のある市北部の有年地区において、千種川やその支流である矢野川、長谷川が生み出した肥沃な土壌を基盤として、農耕集落が築かれていた。市南部でも古墳時代にはすでに製塩が行われており、農地の少なさから考えても、漁業や製塩業を生業として人々が生活していたと考えられる。


千種川（宝珠山山頂より）

中世になると、千種川河口部の陸地化が急速に進み、河口部への人々の移住が始まる。中世末期から江戸時代初期には、千種川の土堤築造が行われて姫路街道、備前街道が整備され、千種川の流路をある程度コントロールしながら城と城下町が築かれた。城や城下町は、それまでの農村集落ではなく流通都市であり、河川交通を必要としたため、当時、東の山沿いを流れていた

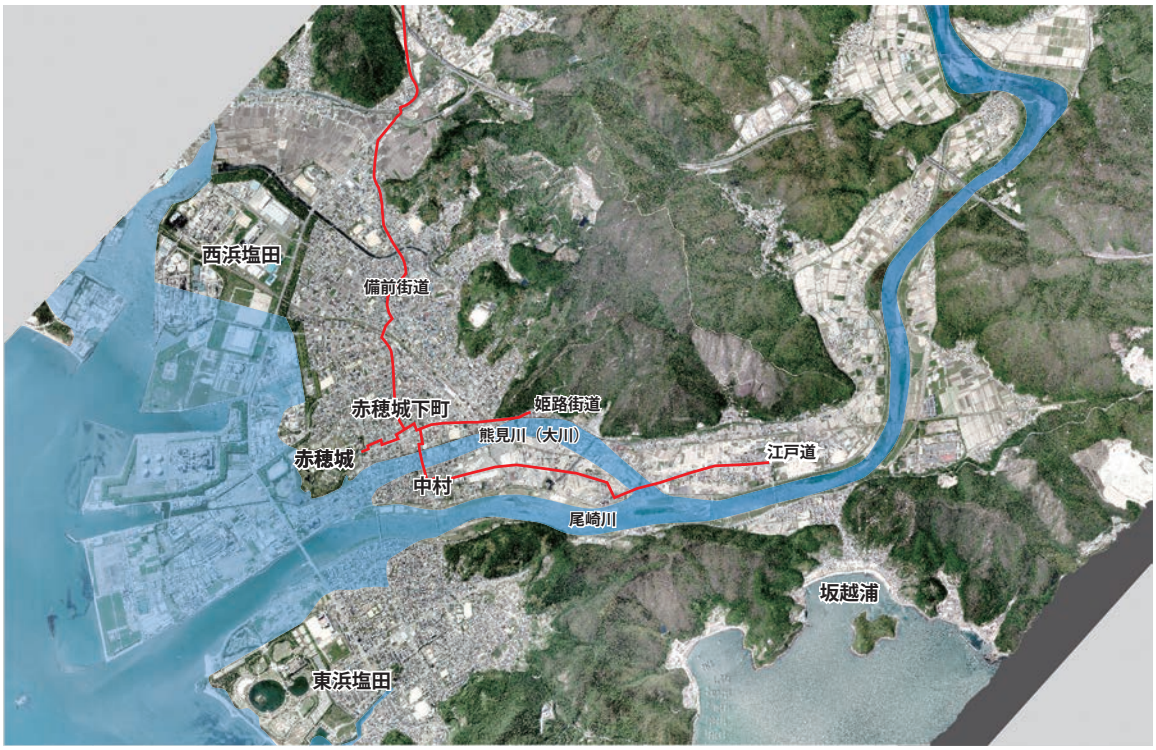


図 19　　江戸時代の主要川筋と旧街道

尾崎川（現在の千種川）を亀の甲で堰き止め、城下町に隣接した熊見川（現在の加里屋川と中広川）に水流を確保して船入をつくり、高瀬舟を通行させた。しかし、千種川上流部で行われていた「たたら製鉄」に伴う「鉄穴流し」による土砂流出によるためか、川底が浅く流れが急な千種川は氾濫も多かった。江戸時代の文献記録では、10 年に一度のペースで洪水が起きている。その被害の最たるものが、明治 25（1872）年の洪水であった。市街地全体が冠水したこの災害対策のため、千種川の本流を現在の場所とし、かつての熊見川（大川）を埋めることとした。現在、この埋立地は公共施設、商業施設や住宅地などとして開発されている。

このように赤穂市の歴史は、千種川との共生、戦いの歴史でもあった。近年でも、平成 16（2008）年の台風による大水で、市北部の有年地区の一部が冠水するなど、その状況は現在も続いている。

（2）生活のはじまり

赤穂で人類の生活が開始されるのは、縄文時代早期の約 10,000 年前頃で、西有年・馬路池遺跡で当時の石鏃が発見されているが、詳細は明らかではない。縄文時代前期の約 6,000 年前には、世界的な温暖化によって海水面が約 2m 上昇し、塩屋・大津地区の堂山遺跡で人々の集住が見られたようである。堂山遺跡では、縄文時代前期から後期までの様々な時期の縄文土器が、多数出土している。

堂山遺跡出土　縄文土器

赤穂において、本格的な居住痕跡が確認できるのは、縄文時代後期の約 4,000 年前である。有年地区では、縄文後期に有年牟礼・井田遺跡、有年原・クルミ遺跡、上菅生遺跡、東有年・沖田遺跡で集落が営まれているほか、東有年・沖田遺跡、有年原・クルミ遺跡では、縄文時代晩期にもその痕跡を残している。

弥生時代のはじまりを示す前期の土器は、堂山遺跡でわずかに見つかっているのみであり、弥生時代中期中葉（約 2,200 年前）になってようやく有年地区で多くの集落が営まれ、市南部でも浜市周辺が生活の舞台となった。弥生時代後期には大型墓が見つかった有年原・田中遺跡、有年牟礼・山田遺跡や、千種川最大の集落遺跡の東有年・沖田遺跡などがあり、集落域が拡大したと推測される。

有年原・田中遺跡　墳丘墓群

昭和 63（1988）年度のほ場整備事業に伴う発掘調査で見つかった、大型墳丘墓群。1 号墓は、直径 19m の墳丘に陸橋部と突出部がとりつき、装飾壺・装飾器台・装飾高坏が出土した。

有年牟礼・山田遺跡　方形周溝墓群

平成 23（2011）年度の発掘調査で全容が確認された、大型方形周溝墓群。1 号墓は、長辺 19m を測り、装飾壺・装飾器台・大型壺が出土した。器台の比較より、有年原・田中遺跡より新しいと評価された。

赤穂市において時期を確定できる最古の古墳は、古墳時代５世紀初頭の蟻無山１号墳である。この時期、西播磨最大級となる全長 52 mの造出し付き帆立貝形古墳で、初期須恵器や馬形埴輪、船形埴輪など貴重な資料が見つかっている。また、同じ頃には麓の有年原・田中遺跡において、朝鮮半島から伝わったばかりの初期須恵器等が出土し、焼きひずみのある資料もあることから、近くに窯がある可能性が考えられている。

古墳時代後期（6 ～ 7 世紀）になると、特に有年原から有年牟礼にかけて、150 基を超える群集墳が形成される。これらのほとんどは横穴式石室墳であるが、野田２号墳や塚山６号墳など、玄室内に間仕切りをもつなど、非常に珍しい古墳も見られる。

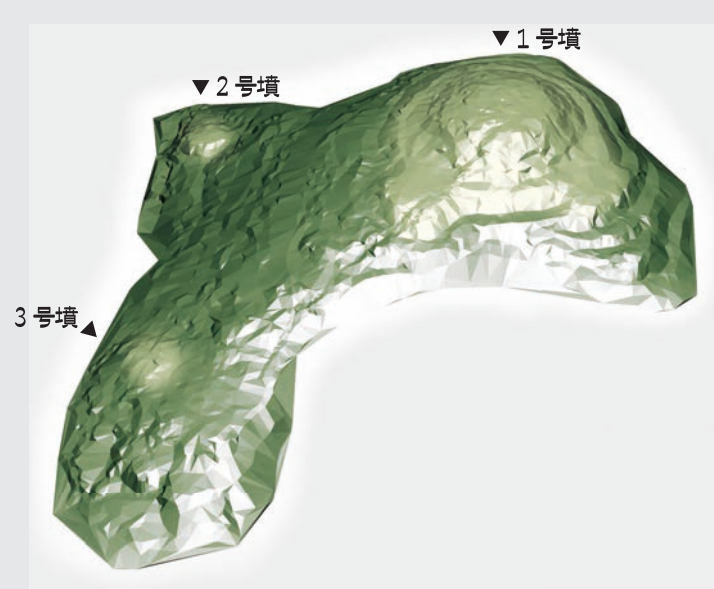


図 20　　蟻無山古墳群　ポリゴンモデル

有年原・田中遺跡出土初期須恵器類

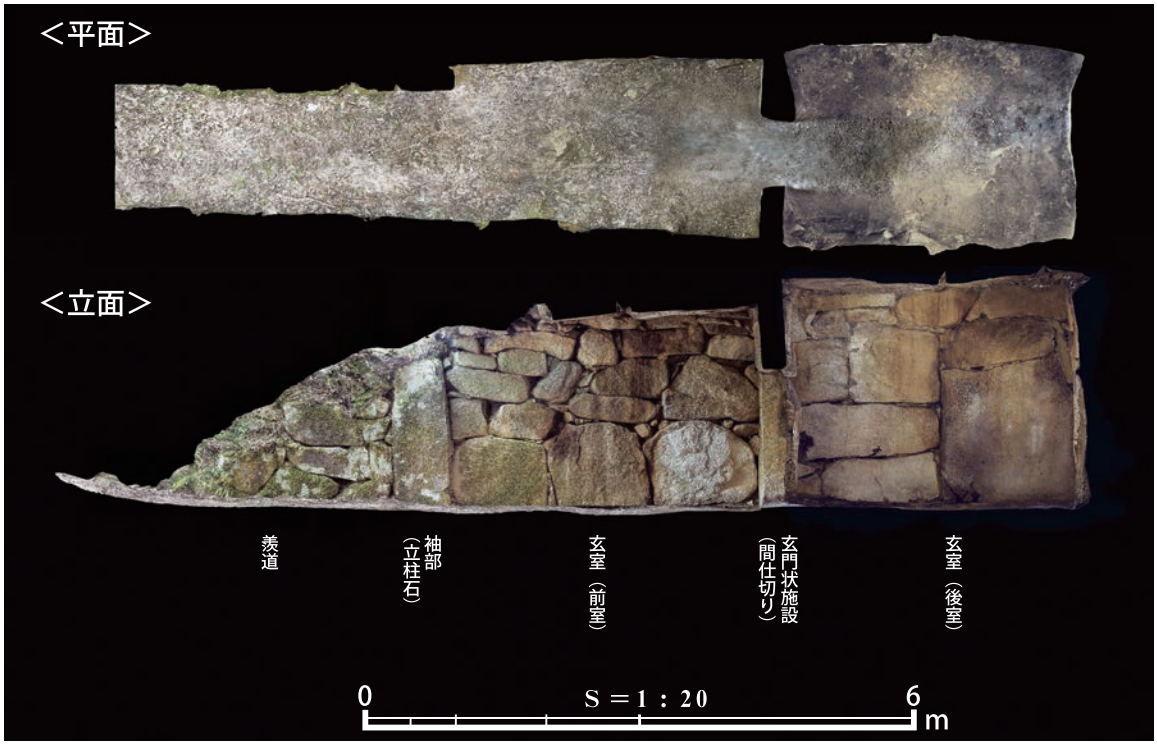


図 21　　塚山６号墳　オルソ（正投影）画像

コラム

前方後円墳の発見

赤穂市教育委員会では、平成 25 年度から、山間部にある古墳などの埋蔵文化財を把握するため、継続的な分布調査を実施しています。分布調査では多くの古墳が新しく発見されていますが、特に重要な成果が、前方後円墳である「放亀山（ほうきやま）１号墳」の発見です。

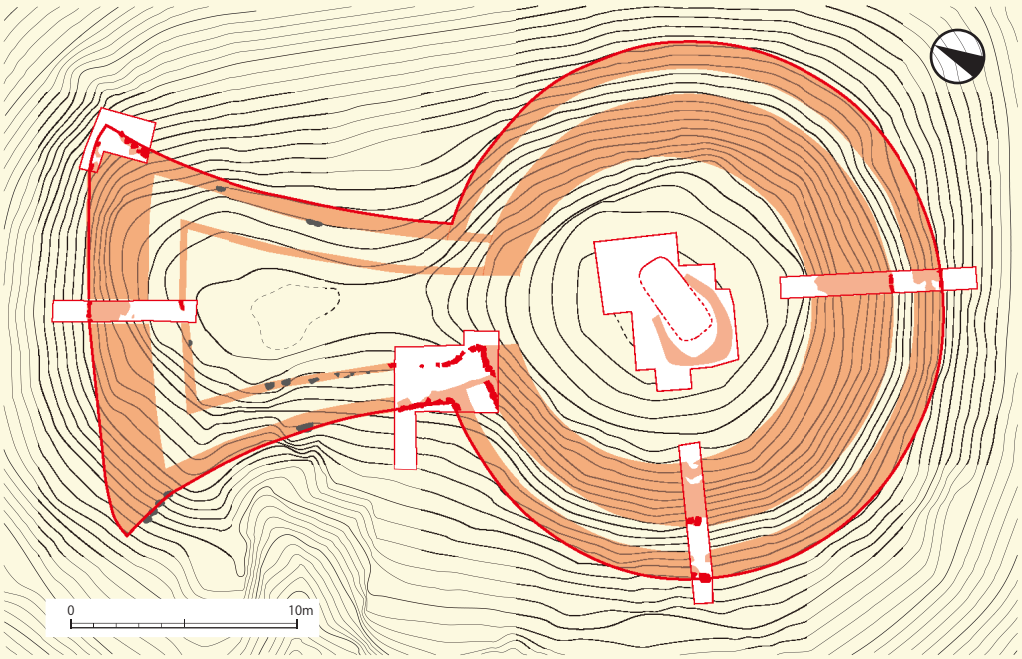
この古墳は、東有年・有年楢原地区にまたがる丘陵尾根上で見つかったもので、全長約 38mと前方後円墳としてはやや小さなものですが、市内初の前方後円墳の発見となりました。

前方後円墳であることを確認するため、平成 29 年度には確認調査が行われ、古墳の表面の葺石が非常によく残されていること、その出土状況から、前方部が「バチ」形をしていること、また後円部墳頂の確認調査では盛土に石材が貼られ、祭祀用の土器が置かれていたことなどが明らかとなりました。

前方後円墳は、地域で最も有力な首長や権力者が用いた古墳の形で、前方後円墳があることは、そこに周辺地域を治める「王」のような人物がいたことを示しています。今回の発見により、古墳時代中期になると前方後円墳が突然見られなくなる西播磨地域での位置づけや、全国的に著名な弥生時代の有年原・田中墳丘墓群との関係、また古墳時代中期の大型帆立貝形墳である蟻無山 1 号墳との関わりなど、今後明らかにしなければならない多くの謎が生まれました。

これらの謎を解き明かすためには、今後の調査研究を待たなければいけませんが、いずれにせよ、赤穂の古墳時代史ひいては播磨地域や日本の古墳時代史を考える上で非常に重要な古墳となることは間違いないでしょう。

墳頂部の調査



放亀山１号墳の発掘調査区と墳丘復元図

（3）古代の赤穂

古代の播磨を語るうえで欠かせない史料『播磨国風土記』には、残念ながら赤穂郡の記載が抜け落ちているが、すでに８世紀中頃の文献には「播磨国赤穂郡」の記載があり、また平城宮跡出土木簡にも「赤穂郡大原郷」の文言が見える。当時の赤穂郡は、坂越郷（現在の市街地も含んでいたと思われる）、周勢郷、大原郷といった行政区分によって統治されていた。

この頃、赤穂は渡来人である秦氏との深い関わりが指摘されている。先述の平城宮跡出土木簡にも、赤穂郡に「秦酒虫」、「秦造吉備人」なる人物の記載があり、古文献を見るとその後も平安時代までは赤穂郡に多数の秦氏が居住していたことが判明している。また、有年牟礼・山田遺跡でも、実際に「秦」と線刻された須恵器が出土していることや、旧赤穂郡（現在の赤穂市・相生市・赤穂郡上郡町）にはかつて秦河勝を祭神とする大避神社が 27 社以上あったとされることも、それを傍証している。

市南部には、古代に「石塩生庄」という製塩のための荘園が東大寺によって所有されていたようで、堂山遺跡で見つかった平安時代の塩田遺構も同時期のものである。当時、河口部の陸地化はあまり進んでいなかったと思われるが晴れの日の多い瀬戸内型気候であることを活かし、塩づくりが行われていたと推測される。一方で市北部では、当時の主要交通路である山陽道（赤穂郡上郡町を通過）から少し離れていたものの、有年原・田中遺跡において数十棟の建物跡が見つかっており、何らかの公的施設があった可能性が指摘されているほか、有年牟礼・山田遺跡、西有年・長根遺跡においても、多くの掘立柱建物跡が検出されている。

平城宮跡出土木簡
4（表）播磨国赤穂郡大原□
（裏）五保秦酒虫赤米五斗
22（表）赤穂郡大原郷秦造吉備人丁二斗
秦造小奈戸三斗
（裏）□庸一俵
23（表）赤穂郡大原郷戸主秦造吉備人

諸記録
753年　『赤穂郡坂越神戸両郷解』「秦大炬」
793年　『東大寺牒案』「秦造一　一　秦造雄鯖　播磨直」
894年頃　『日本三代実録』「播磨国赤穂郡大領外正七位下秦造内麻呂借叙外従五位下」
1071年6月25日　『東寺百合文書』「播磨大掾秦為辰解案」
1075年3月16日　『東寺百合文書』「播磨赤穂郡司秦為辰解案」
1075年4月28日　『東寺百合文書』「播磨赤穂郡司秦為辰解案」
1079年11月3日　『東寺百合文書』「播磨大掾秦為辰解案」
1098年2月10日　『東寺百合文書』「播磨大掾秦為辰久富保公文職井重次名地主職等譲状案」

図 22　赤穂郡と秦氏との関係を示す文字記録

「秦」線刻土器（有年牟礼・山田遺跡出土）

（4）中世の赤穂

中世になると、千種川の三角州も拡大し、政治経済の中心が徐々に有年地区から千種川河口部へと移動するようになる。発達した三角州は、塩田の構築に好条件を提供するとともに、海上交通の中継地または河口港としての重要性が高まってきた。15 世紀には、すでに坂越と中庄（現在の中広地区）が港町として機能しており、坂越荘、赤穂荘が営まれていた。一方、有年地区にも有年荘が存在していたが、特筆すべきは山岳寺院の発達であり、光明寺や遍照院、神護寺など大規模な寺院が構築された。現在も、14 世紀中頃の石造物がいくつか残されている。また、あわせて中世城郭も多数築かれており、城主など詳しいことはわかっていないが、戦乱に巻き込まれた時代があったことを物語る。市南部の河口部にも、赤松満祐の一族が「加里屋古城」と呼ばれる砦を築き、戦乱の備えとした。

有年山城跡に残る陸橋跡

光明寺跡の発掘調査

（5）近世の赤穂

江戸時代に入ると、姫路城を居城とした池田輝政が播磨 52 万石を支配するようになる。赤穂には「掻上城」と呼ばれる城郭が築かれたが、この時代に築かれた城下町や上水道が、現在に通じる都市基盤を形作った。

正保２（1645）年、赤穂に常陸国笠間から浅野家が入封すると、現在の赤穂城を築くとともに、石高の上昇に伴い城下町を拡大整備した。あわせて、池田時代から着手されていた塩田開拓も積極的に進められ、藩財政を潤した。しかし三代続いた浅野家も、元禄 14（1700）年に江戸城で起きた刃傷事件のため改易となる。以後は、永井家、次いで森家が赤穂藩を治めている。

元禄という天下泰平の世の中に起きた「赤穂事件」は、当時の世相を反映し赤穂義士の名を高めた。赤穂事件の史実から生まれた「仮名手本忠臣蔵」は、人形浄瑠璃や歌舞伎において一世を風靡する演目となり、後世に語り伝えられる「忠臣蔵文化」を形成するに至った。

製　塩

江戸時代、赤穂の産業を支えたのは、塩業と廻船業である。塩業は池田時代に行われはじめた塩田開発を浅野家が引き継ぎ、森時代になってからは大坂で塩専売制を敷くほど有力となった。その技術は、当初の汲潮浜から潮の干満を利用した入浜塩田へと移行し、赤穂城の東西にそれぞれ広大な塩田が開発された。一方の廻船業は、坂越や中村で隆盛したが、北前船に荷役市場が移ると、塩廻船として生き残った。

図 23　浅野時代の赤穂城と赤穂城下町（赤穂城下絵図 / 姫路市立城郭研究室蔵）

（6）近代の赤穂

明治維新を迎えた赤穂藩は、当時の藩主、森忠儀がそのまま赤穂藩知事となった。明治４（1871）年の廃藩置県によって、赤穂藩は赤穂県へ、また同年には姫路県に編入、さらにすぐさま飾磨県と改称され、これまでの藩政の一大改革が行われていった。様々な改革のなかで、江戸時代における権力のシンボルでもあった城郭は民間に払い下げられることとなり、赤穂城も城郭全体が民地となった。こうした事態を見かね、花岳寺の仙珪和尚は大石内蔵助屋敷跡を買い取り、大正元（1912）年には大石神社を建立している。

図 24　明治 41 年の赤穂城跡周辺
（『赤穂郡誌』明治 41 年所収）

製　塩

近代においても、赤穂の主産業は製塩業であり、江戸時代以来の入浜塩田による製塩が行なわれていたが、この頃になると塩生産は過剰となり、塩価の下落が進んでいた。また、開国に伴い安価で良質な輸入塩が導入されてきたこともあって、全国の製塩シェアの多くを占めていた瀬戸内地域の十州塩田（播磨・備前・備中・備後・安芸・周防・長門・阿波・讃岐・伊予）では、日本の塩業を守るため、定期的な休浜なども含めた生産調整を行う「十州塩田組合」が組織されることになった。

コラム
赤穂鉄道

赤穂で最初に鉄道が通されたのは明治23（1890）年のことで、山陽鉄道が有年駅まで開業したものです。一方、赤穂の南部は鉄道ルートから取り残されたため、鉄道敷設計画が持ち上がっては様々な理由から立ち消えとなっていました。

明治 43（1910）年になり、軽便鉄道法（簡便な規格の鉄道）が公布されると赤穂鉄道が計画され、大正 10（1921）年 4 月に開通しました。現市街地の㈱ウエスト神姫赤穂営業所にあたる場所に播州赤穂駅が設置され、そこから砂子、坂越、目坂、根木、周世、真殿、富原、有年に駅や停留所がありました。

赤穂鉄道の線路規格は小さく軌間（線路幅）は 76.2 ㎝で、乗客が多い場合登り坂では止まってしまうこともあったと言います。

営業成績は良好で、当初は蒸気機関車２両、客車６両、貨車 10 両であったものが、昭和 26（1651）年には蒸気機関車 4 両、ディーゼル機関車 1 両、客車 16 両、貨車 24 両を数え、塩の輸送なども行いました。

しかし昭和 26（1951）年、国鉄赤穂線が開業すると同時に、30 年にわたる歴史に幕を閉じました。線路の多くは市に寄付されて道路敷きとなり、現在も市民生活を支えています。

真殿駅跡

明治 38（1905）年からは専売制が敷かれ、価格の安定を目的として生産性の低い塩田を廃止する「塩業整備」などが、明治 44（1911）年以降に行われた結果、塩の生産量は増大した。しかし、太平洋戦争が勃発すると深刻な塩不足となり、自国内での製塩が見直されるようになった。このように、塩の生産は社会情勢の影響を大きく受けながら専売局の動向に依存せざるを得なくなり、国による統制へと転換していった。

（7）現代の赤穂

戦後、新しい日本の国づくりが行われるなかで、赤穂では昭和 26（1951）年、赤穂町・坂越町・高雄村が合併して赤穂市制が施行され、昭和 30（1955）年には有年村が、昭和 38（1963）年には福浦地区が赤穂市となった。

1950 年代の高度成長期に入ると、昭和 26（1951）年の国鉄赤穂線開通もあわせ、観光地としての整備も進められた。昭和 30 ～ 40 年代に行われた赤穂城跡三之丸大手隅櫓の復元や、御崎の観光開発などはその例である。また、昭和 49（1974）年からは国史跡赤穂城跡の整備も開始されている。住区整備も積極的に行われ、昭和 52（1977）年には上仮屋地区の区画整理事業が完了し、現在の赤穂城周辺の街並みが整備された。その後、ＪＲ播州赤穂駅から赤穂城跡へと至る「お城通り」も、平成 22（2010）年に整備が完了している。

近年は、赤穂城跡周辺の赤穂・城西地区、スポーツ・レクリエーション施設や温泉のある御崎地区、古い町並みの残る坂越地区、古代遺跡が多く眠る有年地区など、各地区の特徴を生かした観光都市としての事業が展開されている。

製　塩

昭和 33（1958）年に、塩業の産業革命とも言える流下式塩田への転換が東浜・西浜の両塩田で完了したが、西浜塩業組合は昭和 34（1959）年の第３次塩業整備を受けて赤穂海水工業株式会社を設立、昭和 42（1967）年には本格的なイオン交換膜製塩への転換を果たした。

一方で東浜塩業組合は、昭和 46（1971）年の第４次塩業整備を受けて流下式塩田による製塩を中止し、化成部門が中心となり、赤穂化成株式会社となった。かつての塩田跡地は、西浜塩田跡地がグリーンベルト（緑地帯）を隔てて工場地帯となり、東浜塩田跡地は住宅地と県立赤穂海浜公園へと生まれ変わった。なお、塩の専売制は平成 17（2005）年に解かれて完全自由化し、さらなる事業展開が行われている。

かつての専売公社跡付近　新川の風景

新川周辺には、かつての旧日本専売公社赤穂支局（現赤穂市立民俗資料館）や塩倉庫群、運搬用車両のレールが敷設された橋など、当時の景観がほぼそのまま残されている。

図 25　昭和 28（1953）年の赤穂市都市計画図（坂越町、高雄村の合併直後の赤穂市。方位に過誤がある。）

コラム
西浜塩田関係史料の発見

江戸時代の赤穂塩業は、赤穂城を中心にして東浜（尾崎・御崎地区）、西浜（塩屋・西部地区）と呼び分けられ、それぞれで発展してきました。

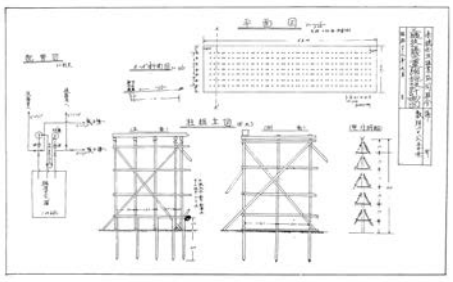
明治 17（1884）年に十州塩田組合赤穂支会が設立されて以後、休浜や製塩の改良等を協議するための様々な組合がつくられ、大正 12（1924）年以降は、赤穂東浜信用購買利用組合と赤穂西浜塩業組合の２団体が運営されていました。

赤穂東浜信用購買利用組合は、第四次塩業整備の対象となって製塩を中止し、昭和 47（1972）年に解散しましたが、化成部門が存続する形で赤穂化成株式会社を設立し、特殊用塩の製造販売を開始しました。組合の解散後、赤穂東浜信用購買利用組合の文書は一括して赤穂市に寄贈され、赤穂市指定文化財の指定を受けて保管されています。

赤穂東浜信用購買利用組合文書

一方、赤穂西浜塩業組合は、昭和 35（1960）年に赤穂海水工業株式会社、昭和 40（1965）年には赤穂海水化学工業株式会社となって、流下式塩田を廃して認可第 1 号のイオン交換膜製塩を開始し、現在は株式会社日本海水として引き続き製塩を続けています。

このように西浜塩田については経営が引き続き行われていたため、関係史料の所在は不明なままでした。しかし平成 29 年度になってその所在が明らかとなり、株式会社日本海水から赤穂市に一括寄贈されました。今後の詳細な調査にご期待ください。


昭和 27（1952）年作成の枝条架設計図
㈱日本海水旧蔵

枝条架の並ぶ西浜塩田（昭和 30 年代）　㈱日本海水旧蔵